

に人目はひかずとも、見すばらしくとも、家庭に入つて其の王となり、専心家事を治め、子女を教養すべきものであります、我が一身は我が身の勝手と理窟をつけければ、ドンナ理窟でもつきますが、實際我が一身は此の一塊肉は、祖先の血を受けて生れ出で、又之を將來に傳ふべきものである事を思ひますれば、其の將來の子孫の祝福を圖る爲め、其の繁榮を願ふ爲め、自己の抱負も、地位も、名譽も、犠牲にして之に盡すといふのは、一步進んだ考ではありますまいか、どうしても我が身で生みし程の子ならば、我が手で育てる重い責任があります、其の責任を盡されないのは、眞の母様ではありません、立派な母様とは申されません、或は自己の働ある爲めに人手に預けられるのは、尊い何物でも求める事の出来ない立派な愛の糸を以て、物質にかへらるゝので實に惜しみて余ある事と存じます。

保姆のすゝめ

双葉幼稚園 後藤りん

三八

○ 幼児を保育するにも終始勅語の御主旨を忘れざる様心懸くべきこと

○ 幼児を保育するには、なるべく、天真爛漫なる美情を、そこなはざるやう

○ 幼児をとり扱ふには、出來うる限り、家庭的が宜しい

○ 幼稚園の目的は幼児の心身を圓滿に發育して且つ又善良なる習慣を得せしめると云うことを忘れぬやう

○ 習慣は第二の天性と云つて、將來の能力及幸福の基礎、幼児にとつては實に大切でありますから正直、獨立、忍耐、服従、規律、秩序等は時宜につれて知らず識らずのうちに程よく躡けられたきもの

○ よく、幼児の個性を觀察して心身の圓滿並に

○行に發達せしめよ

○幼児をとり扱ふには一種云ふべからざる呼吸あり、したしく幼児と同遊して此呼吸をのみこむこと

○(幼児をして幼児たらしめよ)の古言をよく味ふべし

○幼児の悪習慣をためんとならば先づ己の品性より正しくして後にせよ

○愛と真面目と周到なる注意にて美德を養へ(美德)

○無意識のうち善惡共に感化するものであるから大に氣をつけよ

○幼児をして、吾が手足の如く、活動させやうと思ふたならなるべく、命令を下す如き態度をとらず、他人をして、吾が意志を彼の意志であるやうに感せしめよ、(例へば一玩具をかた附け

やうではありませんかと云ふやうに)(美德)

○無法のとり扱ひは反抗心を起して、返ていけな

○正當の權利は充分に主張してやらないと卑屈の人物をつくるやうになる(美德)

○「ロツク」曰く善と惡と賞と罰とは道理を具有する動物に對する唯一の動機である、然れども、通例の人は其取捨を誤るが故に害となると、實に幼児保育の任に當る人々は此處の呼吸を呑み込むべきこと

○其惡を憎みて、其人を憎まざる、主義を採られなきこと、通例誰でも其惡を憎むのあまり、其人をも憎みたがるものである、さうなると其人をして、益々邪道に陥らしむる傾きがあるから、此點は保母ばかりではありません誰でも大に注意すべき點であります

○大抵幼稚園の保母たちは手技の方に力を入れられますが、これは第二位において、初めは成るべく自由に遊ばして先づ服従とか規律とか云ふ方を先きに仕込むが宜しい、但し壓制は大々的

の禁物

○朝夕、着實に仕事をする人でも、觀察推理をしない人は、文明と共に進歩して、大に活動することが出来ない(美德)

○保母ばかりではありませんが、成るべく、識見を博くしておきたい

○右よりもより大事なこととは品性を重んじられた

○幼児をして、どの保母にでも服従するやうに、保母同士自重して威厳を落さぬやうに終始心懸くべきこと

○總て精神上の教育は兒童の習癖と正反對に指導すると、八分は成功するやうであります、が、これは保母其人の技量にもより(又世間の人と反對の方法をとれとは(美德)のうちにもあつた

○幼稚園は、積木や、板排べを、教へるのではない、是は保育其もの、方便につかうのだから、

其積りで、やつてもらひたい

○保母に限らず、教師は凡て生徒の友になれど云ふは、私の終始口にする説なのです、何んでも、自分が受け持った、生徒の年齢相當な、考へを以て、其生徒の友になれと、云ふのです、これが出来れば教授法の訓練法のと六ヶ敷こと

はいらぬ、つまりこれが心理であるのです、これが解決が出来れば實に良師であると思ふ、友たることを得て次に生徒の模範たるべき良友となるのです、既に、良友たる事が出来得れば、良師たることは、難からずと云ふのであります

○幼児はなるべく室内の遊戯よりも、より多く戶外にて遊ばせるやうに心掛けられたし、出来得るなれば、成るべく、屢々郊外に連れ出して、自然界に對する、趣味を、高尚に導きたきもの

○保母は常に幼児の顔面及坐作、進退に就て注意ありたし、一體幼児が活潑に活動なし居る時は、

あまり心配することはありませぬけれども、片隅に凭りかゝり、何事も爲さず、沈んで鬱ぎ居るやうな子供は、却て、監督を怠つてはなりません、斯の如き兒は必ず身體に異状があるので、神經質の者とか、病氣の潜伏期とか、必ず常態でないのである、そこで活潑に撥ね廻はる、幼兒の監督は誰も注意をするのですが、この静におとなしい、方は、つい監督を怠たる、傾きがある、これは能く注意をして貰ひたい、又、人目を離れて遊ぶ子供には、却て陰險なるが、間々あるのであります

○又食事の際にも能く一人／＼に就て十分の注意をして貰ひたい、不行儀に喰べるもの、よく噛み碎かぬもの、食事を急ぐもの、ご飯や、菜を、きたなく、喰べるもの、喰べこぼすもの、又ご飯なり菜なり殊更喰べ残すもの、或は全くきらひなのであるか、食が進まぬのであるか、横着なのであるかを、よく／＼観察注意して徐々に

矯正して貰ひたい、茶碗、辨當、箸の始末等、悪い相當に悪習慣のつかぬやう是れ亦注意をして貰ひたい

○又幼兒が随分汚ないことを平氣で遣つてゐる、それを保母が見て知つて居ながら、自分が動くのを面倒に思つて洗つてやるでもなく其ま、部屋に這入つたり、辨當などを、喰べさせる、又手技なぞでも子供だから、こんな位でも、かまわぬと言つて、歪んだまゝのものを、與へてやる、又着物のきせ方でも、子供だからと云て、よい加減に襦袢や、腰巻きの、たくだまつたまゝ、着せて、やつたり、又食器なぞでも、一寸洗つてやれば、何んでもないものを、其ま、使ふと云ふつまり、自分の手數をばぶくと云ふ所から随分不潔なことや、不親切なことを、遣て居るのを見ることがあるが、私はこれが心から憎むべき、仕業だと思ふ、なせなれば幼稚園の兒童などは、實に天真爛漫な、未だ嘘と云ふことを、

少しも知らぬ、誠に清い神のやうな者で毒を丸めて喰べさせても、すまして喰べると云ふ程、ごく／＼神聖であるのだ、それと知つては、却々良心がとがめて、出来ないものだが、人によつては恬としてやつてゐる、これは保母ばかりではない、婢僕などには却々澤山に見かけることだ、實に／＼罪すべきことであると思ふ

○保母は看護法の一端を心得られたきこと、大抵永く兒童を取り扱つて居ると、病氣、怪我、其他の救急の場合、大害に至らぬやうに、手當をすることが出来ますが、保母其人によつては、時々大に慌てたり、些細なことに大騒ぎをやつたり、大に氣をつけて、取り扱はなければならぬことを、其まゝになし置たり、随分經驗上危険なことがある、斯う云ふ場合に臨むでは、保母はなるべく、慎重の態度を失なはぬやうにありたい、幼兒、精神修養のさまたげにもなりませんから、それをするには少しく經驗をつまねば

ならぬ

○保母は愛情のあるものでなくても困るが、あまり溺愛する人でも困まる、よく世間の人は、保母は、子を持つたことのある人でなければ、不適當だ、持つたことのない人は、思ひやりがないから、いかぬとか、云ひますが、私は自分の實驗上、矢張、持つても、持たんでも、先天的にこの職が、其人に備つてゐるものが、一位のやうであります

○職業の爲めに保母たるにあらすして、保母たるべき責任あつて、保母となり居ることをわすれてはならぬ

○變事に備ふる、用意を、前以て持ち合せ置くべきこと

○室内に据ゑ置かる、火鉢、暖爐等には必ず水を入れたる器をかけ置かれたきこと、衛生上に益

あるのみならず、震火災の豫防ともなります

○何事も實行一致を期し、從て多言を慎まるゝこ

と

○家庭教育の完全は、家内一致せなければ、行はれぬと云ひますが、幼稚園も、保母同士一致して居らなければ、完全な保育は出来ません

○服従の徳を養はんとて、其意義を誤り、壓制に陥つてはいけません、古人も「兒童たる時は父母の従順なる従僕たり其成長に及んで之が親友たるべし」とこれは保母もよく味はつて貰ひたい

○幼兒、若し、過ちたる時は、吾より其非を言はずに、幼兒自身の衷心から、其非を悟るやう、仕向けられたし（過つて改むるに憚るなからしめよ）

●静岡縣保育會 同會は去る四月二十九日其第五回總會を静岡幼稚園に於て開會し豫て宿題となり居りし研究事項の發表、其他來賓の講説、祝辭並に餘興等あり、頗る盛會なりし由、來年は清水町に於て第六回總會を催ふことに決定せりと云ふ。

●群馬縣保育會設立 從來同縣下の幼稚園は各園孤立の姿なりしが先般有志者相謀りて高崎幼稚園に會合し群馬縣保育會を設立し毎年四月及十月の二回に總會を催ふすと決定せりと云ふ。

子供の自尊心

倉橋惣三

世に最も誤れる教育とて、子供の自尊心を害する教育はど恐ろしいものはない。折角吾々が子供のために盡すのも、つまりは子供を正しい自立に至らしめ度い目的である。而して、子供の心の正しい自立といへば、即ち自尊心がその根底にならねばならぬ。若し誤つて此の根底を害せば、いろ／＼の世話も却つて仇になる。

先づ自尊心とは何かといふことから考へる必要がある。自尊心の眞意義が往々誤解せられて居るからである。自尊心とは讀んで字の如く、自ら己を重んずるといふに他ならぬ。併し、茲にすぐ二つの問題が起る。重んずるといふのは如何なることか。自分といふのは如何なることか。此の二つが正しく解せられて居ないと、自尊心が飛んだ間違つたものになる。